



1_国道6号線から海岸方向を臨む山元町の海岸線 2・3・4_種を拾い集めながら交流を深める学生と生徒 5_種を見せ合う児童たち 6_バケツに水を入れて種を選別する学生と生徒 7_「元気に育ってね」と心を込めて一つ一つ丁寧に種を植える生徒たち



長野大学「たねぷろじえくと」 山元町の豊かな里山を再生しよう 白石第二小の児童が希望のタネを播く

5月11日、東日本大震災で大きな被害を受けた山元町の里山を再生しようと、長野大学（長野県上田市）の高橋一秋准教授と同大学の学生17人が、白石第二小を訪れました。中学、高校時代を白石市で過ごした高橋准教授が、被災地の里山再生を通じた復興支援事業「たねぷろじえくと」（被災地里山救済・地域性苗木生産プロジェクト）を企画。交流のあった上田市の塩田西小と白石第二小の先生などに協力を呼び掛け、昨年7月から準備を進めてきました。

この日は、高橋准教授がプロジェクトの概要を児童たちに説明した後、学生と児童がグループに分かれてカードゲームで交流。この日採取する数種類の種や葉、それを食べる生物を楽しみながら学びました。

その後児童たちは、益岡公園に移動。学生と児童が、拾った種の数を競ったり、見つけた種の大きさを比べたりするなど、元氣いっぱい種を拾い集めました。

学校に戻ってからは、拾った種を水をはったバケツに入れて、底に沈む種と水面に浮かぶ種に選別。浮いた種は中身が入っていないため、植えても発芽しないことなどを学び、底に沈んだ約300個を、元気に成長することを願いながら、一つ一つ丁寧にプランターに植えました。発芽率は20〜30%。順調に成長すれば60本以上の苗木になり、山元町に木々の緑を蘇らせることが期待されます。

参加した佐藤大夢くんは、「種を育てて、津波で流された小学校の復興を手伝いたいです」と話し、遠藤雄斗くんは「少しでも多くの芽が出て、役に立てたらうれしいです」と笑顔で話してくれました。

上田市の塩田西小の児童たちも5月18日に、白石市で集めた種を使い、塩田西小で種まきを実施しました。

白石第二小と塩田西小では水やりや植え替えなどを行い、3年間で20〜30cm程度の苗木に成長するよう取り組み、育てた苗木は山元町の坂元小に寄贈。山元町内での植樹も計画されています。7月には学生が再び白石第二小を訪れ、顔を出した芽を観察する予定です。

被災地に暮らす人たちの痛みを長きにわたって心に置き、次代を担う子どもたちとともに取り組もうという「たねぷろじえくと」。子どもたちが植えた種が、子どもたちの心とともに、大きな芽を出し、大きく成長していくことが期待されます。



たかはし かずあき
高橋 一秋 さん

1970年生まれ。学術博士。中学・高校時代を白石で暮らす。新潟大学大学院修了。専門は森林生態学。

「たねぷろじえくと」は、山元町と白石市で採取した種子から、子どもたちの手で苗木を生産し、3年後に山元町の被災地に植栽することで、震災前の宮城県南地域にあった豊かな里山を再生することを目的としています。また、参加する学生や子どもたちがこのプロジェクトに携わることで、他者を思いやり、被災地復興のために何ができるのかを真剣に考えることができる「想像力豊かな心」と、その思いを行動で示すことができる「温かみのある人間力」を育てることも重視しています。

白石市は、中学から高校の青春時代を過ごした思い出の地。大学進学を機に宮城県を離れ、森林生態学を中心とする学問の道に進んできましたが、震災の後、自分の専門を活かして震災復興に貢献できることは何かと考え、このプロジェクトを立ち上げました。次代を担う若い世代（小学生～大学生）の協力で山元町の里山の再生に、少しでも貢献できたらと思います。



(上)磯崎山公園から見た震災前の磯浜漁港南 (下)現在の同地点。海岸林や家屋はすべて流された